

絵は“観る楽しさ”を教えてくれる

ごとう うたか
神戸 宇孝(鳥類画家)

野鳥の動きと捉えるために

私は幼稚園の時にジョウビタキという鳥に出会ってから野鳥観察を続けています。当時は今のような望遠もできる安価なデジタルカメラがなく、子供にとっては高価な望遠レンズとフィルムで野鳥撮影は夢の夢でした。そんな中、小学生の時に動物画家の藪内正幸さんの野鳥のペン画集「野鳥の四季」(講談社)に出会いました。

野外で出会った野鳥が生き生きとした姿そのままに絵になっているのを見て模写をするようになり、描くおもしろさを知りました。

これまで私は藪内さんに2度お会いしました。最初は小学生の時にかけた講演会でした。講演会の後に幸運にも自分が描いた鳥の絵を見ていただける機会がありました。すると「いい絵を描くね〜！」と褒めてくださり、鳥全体の骨格を意識しながらたんだ翼と足の向き、爪などの描き方を丁寧に指導していただきました。

「例えば鳥の足が草の中に隠れている絵だとしても、描かれていない足を“知っているけれど描いていない”のと、“知らなくて描けていない”とでは、最終的な全体の雰囲気が見違えるほど変わるから、きちんと知識を深めなさい」とも教わり、それからは野外観察に加え、博物館へ行った時は野鳥の剥製の羽毛一枚一枚の模様や足の指の鱗の様子などをしっかり確認していました。



図1. 野鳥のペン画集「野鳥の四季」(講談社1982年)

2度目は上野動物園のサル山の前でした。浜離宮での朗らかな笑顔と対照的な真剣な眼差しでニホンザルの動きをじっと目で追いつける“画家としての藪内正幸”の姿に、畏れ多くて話しかけられませんでした。

この話を息子の竜太さん(藪内正幸美術館館長)にすると「きっとその時に声をかけても大丈夫だった

と思いますよ」と仰います。しかし、私にとっては画家として生きる大事な要素を見た時間だったと信じており、声をかけなかったことも、大切な思い出としています。

留学先にて

野鳥を描くことが楽しくなって専門的に学びたくなり、私は英国へ留学しました。英国は、大航海時代(16世紀頃)にはカメラがなかったため、探検や冒険に絵師(イラストレーター)を連れて行き、記録用に描かせた経緯があります。現在でも図鑑やインテリアに野鳥画の需要があり、多くの鳥類画家が活躍をし、教育機関に生物画の専門的学科も存在しています。

コースは3年で、1年目はとにかく様々な生物の骨格を描きました。藪内さんから教わったように、骨格を意識して描くことは最も重要なことと教わりました。

留学中の授業で、大変勉強になったことの一つは“描いている絵は何のために描いているか”という視点です。英語圏ではイラストレーションとアートは明確に区別されています。イラストレーションは正確には“解説のための絵”を指し、描いた内容を他人が理解できるように描くことが重要視されます。その一方で、アートは自分の表現したいものを描きます。単純に言うと、絵を「誰かのために描く」とイラストレーション、「自分のために描く」とアートになります。そのような視点で、帰国後に藪内さんの絵を藪内正幸美術館で拝見すると、絵によってイラストレーションとアートの違いを(意識されて描いておられたかどうかはお聞き

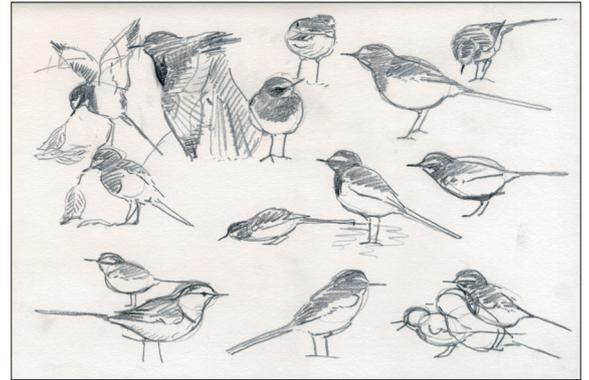


図2. 私のスケッチ画。

していませんが)、きちんと分けておられると感ずます。今回の展示でも、その違いをみなさんに感じていただけたら、藪内さんの絵のファンの一として嬉しく思います。

絵が教えてくれる“観察のおもしろさ”

「鳥はどうやったら描けますか？」と私は聞かれると、まず“よく観察すること”と答えます。よく似た鳥もそれぞれに微妙に違って、その違いが“その鳥らしさ”を特徴づけることもしばしばです。模様に加えて、目の大きさや尾羽の長さ、嘴の形など、その「らしさ」に気付くのは、写真を眺めている時よりも、不思議と観察をしているときが多いのです。例えば、ハクセキレイとセグロセキレイの見分けは図鑑では色での見分け方が紹介されていますが、胴体の厚みに少し違いを感じる事が多く、特に脚の付け根から尾羽にかけてセグロセキレイの方がポテッとしていることが多いと感じます。実際にそのように描くと納得のいく絵になります。絵を描くことによって、あるいはじっくりと観察することによって、図鑑では紹介されていない特徴に気づくことができるのです。

また、体の動かし方にも特徴が表れるので、観察を通してその動きを目に焼き付けることも重要です。絵では“鳥の動き”も表現できるので、野外で役立つ識別ポイントを、絵ならば伝えやすいと私は信じています。「野鳥を知るには写真も良いけれど、絵も良いですね」。そんなことを、一人の鳥類画家として伝えていきたいと思っています。